・自分の趣味品や子どものゲームで目的なものがはっきりしている場合は、ネットショッピングを積極的に使っている。

研究課題 1-3 「21 世紀成年者縦断調査」分析

「21世紀成年者縦断調査」から、育児は近年になるほど夫婦で担うものという意識が高くなるが、家事は依然として妻が担うもの、とする割合が高い。

平成 14 年(2002)年から、厚生労働省によって実施されている「21 世紀成年者縦断調査－国民の生活に関する継続調査－」では、同一の調査対象を継続的に調査している。同調査では、20 歳から 34 歳の男女およびその配偶者を対象に、ワーク・ライフ・バランスの実現や社会保障の充実、若者の雇用対策などの観点から、主として、就職、結婚、出産、転職などに関する実態や意識及び行動の変化を継続的に調べている。

本研究の平成 24 年度研究における第 9 回「21 世紀成年者縦断調査」(2010 年)の夫妻ペア票(5786 票)を用いた分析の結果概要は以下のとおりであった。

- 調査対象者は、平均年齢・夫 37.98 歳、妻 36.05 歳、子ども数 1.54、小学校入学前の子ども数 0.66 人、末子年齢 5.79 歳、妻・就業 57.7%、休業中 4.2%、無職 38.0%、夫・就業 98.2%、休業中 0.3%、無職 1.4%、夫妻同居 98.4%であった。
- 夫・就業グル―プの平日の家事・育児時間は 1.00 時間で有意に短かった。一方、休日の家事・育児時間は就業グループ、休業グループ、無職グループの間に有意差は見られなかった。
- 妻の家事・育児時間については、平日、休日とも、各グループの間に有意な差が見られ、就業グループが最も短く、休業、無職の順に多かった。

家事・育児時間と子ども観 16 項目との関連を検討したところ、夫妻とも、子どもを持つことをポジティブにとらえているグループにおいて家事・育児時間が長いが、ネガティブにとらえているグループでも長い場合があった。「仕事に張り合いが生まれる」と考える夫は休日の家事・育児時間が長かった。一方、同様に考える妻の場合、平日の家事・育児時間は短かった。

(第 1 年度・研究成果の PR)

(1)調査協力者への情報提供:独自アンケート調査に関しては、平成25年3月末、すべての設問について4県別回答分布(χ二乗検定・コメント付)を集計した簡易報告書(全45ページ)を各県連合本部に3部ずつ郵送した。総括研究報告書は希望冊数分、お渡しする予定である(連合新潟:希望100部)。ヒアリング調査の立ち上げ録は立ち上がり次第、順次、インフォーマントに内容を確認いただいている。

(2)学会発表・論文投稿:NCFR(2013年11月、アメリカ)。

(3)大学教育での若者(自世代)への講義:高橋は女性労働論や家族関係論、黒川は家族社会学、倉元はジェンダー関連の講義で調査結果の概要を伝える。

(4)講演、一般紙でも、研究成果を織り込んだものを発表する。

第 2 年度:平成 25 年度

研究課題 2-1　ヒアリング調査の継続(鹿児島、兵庫)	高橋・黒川・倉元
研究課題 2-2　インターネット調査による全国調査の年	高橋・黒川・倉元
研究課題 2-3　「21 世紀成年者縦断調査」(継続)	倉元・高橋

研究課題 2-1　ヒアリング調査の継続(鹿児島、兵庫)

平成24年度に引き続き、9月と3月に鹿児島(計8名)、9月と2月に兵庫(計12名)の合計20名に実施した。

ここでは、妻とはfifty fiftyの関係でいたいと話したN氏、母親に何でもしてもらう父親を反面教師としているOk氏を紹介する。

N 氏

日時:2013 年 9 月 18 日(木)18:15～19:45
場所:シーサイドホテル舞子ビラ神戸、1 階ロビー
ヒアリング:高橋桂子(文責)、黒川衣代

基本的属性

奈良県出身 35 歳。東北大学修士課程卒業。仕事はエンジンを作る仕事で、勤務時間は 8:30～17:30。

妻(見合い結婚、32 歳)は神戸大学卒。現在、医薬系で働いている。

見合い結婚。見合い相手に対する要望として「働いている人がいい」

子どもは生まれたばかり(生後 1 ヶ月)で、現在、妻の実家。妻は半年育児休業する予定。実家は生駒山。母親は「箱入り娘」。男ばかり三人兄弟の長男。次男は既婚・妻専業主婦、三男は独身。

キーワード

「fifty fifty で何でもやっていきたい」、「夫婦間でバランスが悪いのは良くないと思う」

家事関与の実際:

料理:日常は「嫁」、週末は時々つくる。魚つったりさばいたりする

片付け:食洗機

洗濯:半々か。全自動洗濯機」、干してたたむ。

掃除:「部屋が汚いのが嫌」(→要求水準説)

風呂:髪の毛をとったりする

洗面所:洗う

床:ぞうきんもかける

アイロンかけ:する→「部屋が汚いとダラしない」

家事分担は話し合って決めたか？

結婚当初、話しあった。嫁さんはテキパキ動き、表面的に満遍なく対処できるタイプだ。しかし「分担」という形で負担を明確にすると、仕事で疲れて風呂掃除をしていないとき「風呂掃除やってくれた？」といわれてケンカになった。そこで、「分担」を決めるというよりは「最後に風呂にはいったものが掃除する」というように変えた。負担を均等というより、ざっくりと「半々でやれば良いと思う」

大学に進学するときに、母親などから料理など習ったか？

あまり記憶にない。必要なものを少し。大学では 3 年生からスターバックスでベイトしたが・・

家計の分担はどうなっているか？

自分に浪費癖があるので、自分の給与を嫁に渡し、管理してもらっている。小遣い制。キャッシュカードで自由に引き出せる小遣いは月 2 万円程度。

家計に関しては、結婚して 1 年たったとき「保険アドバイザイー」に相談して、積立保険など見直した。無料で相談できるので、何人かに相談した。

「fifty fifty で、何でもやっていきたい」。

なぜ？「夫婦でバランスが悪いのって良くないと思って」。お見合いのときも「働いている女性が良い」といった。お互い、fifty fifty でやりたいと思ったから。

学校教育との関連について

中学校で、多分、カレーを作った。家庭科は嫌いじゃなかった。息抜き科目だったかな。高校は私立だったが、裁縫が苦手だったので「母親にやってもらった」

家事を「より効率的にやろう」と思っている。

自分の時間がほしいから。それは、自分の時間が欲しいから。趣味はランニング。学生時代、自転車部に属していた。富士登山レースに出場した。トレーニングは土日。早朝 6 時に起きてトレーニングをしている。夫が趣味をもっていることが大事。趣味があれば、工夫して効率よく料理でもやろうと思うはず。

同時に、家に快適性を求めている。自分にとっては家庭がまずあってその上に仕事がある

家事とは何か

義務的なもの、効率よくやりたいもの。「つまらないとか退屈とは思わない」。（「家事をしない夫婦は破綻する」・・）

Ok 氏

日時：2014.2.22（金） 12:00-12:30
場所：S 社 組合事務所
ヒアリング：高橋桂子（文責）、黒川衣代

基本的属性

・本人 34 歳、妻 33 歳）、子ども（長女 4 歳、次女 2 歳）。現在、妻は育休中で 4 月から復帰予定。博士課程在籍時に高校時代の同級生と学生結婚。

父親の影響

・実家は父親が何もせず「あーせーこーせー」といっていた。それを見て「ただの我儘やないか」

「自分でせいや」と思っていたが、父親に面と向かって言うことはなかった。母親からも愚痴のようなものを聞いたことはないが、父親の態度がある意味、反面教師だった。母親と話すというようなことはあまりなかったが、母親と時間・空間をともにすることは多かった。

学校教育における家庭科

・家庭科の時間には、中学校の記憶がある。調理では、味噌汁のだしをとった。裁縫では、ミシンで袢纏を作った。カレーなど「料理」を作ったという記憶はないなあ。

家事との関わり経緯

・実家時代は何もしなかった。学生結婚したとき、自分は学生で妻が働いていた。そこで家事をする術をつけた。自分は食事担当で、「結婚、凝り性」でレシピなどはインターネットで検索して作っていた。肉じゃがが、モツ煮込みやカレー、シチューや餃子は問題なく出来る。

・自分が家事をすると、妻が「ありがとう」という。

現在の家事参加状況

・現在は妻が育児休業中なので、妻がメイン。自分がやっているのは、皿洗いや風呂掃除、布団干しや犬の散歩など。復帰したら分担して「出来る範囲でやりたい」。

家事の効果

・敢えていえば「気分転換」か。また、家事スキルは「身につけておくのに越したことはない」し、結構、好きかもしれない。

嫌いな家事

・アイロンかけ、風呂掃除やトイレ掃除など

研究課題 2-2 インターネット調査による全国調査の年　　高橋・黒川・倉元

① 第 1 年度の結果と修正点

平成24年度には、連合新潟、連合兵庫、連合徳島と連合鹿児島の組合員を対象に郵送留め置きによるアンケート調査を実施し、3918サンプル回収を得た（回収率 55.2%）。このデータをもとに分析枠組みに基づき、階層的回帰分析、パス解析を行った所、以下の知見を得た。

- 自身の家事に関する能力・技術が高いと評価するものほど、家事の行動意図が高くなる（パス係数 .31）。
- 妻の仕事を評価しているほど、既婚男性の家事の行動意図が高まる（同 .11）
- 小学校や中学校における家庭科教育を高く評価するほど、既婚男性の家事の行動意図が高まる（同 .09）
- 妻のgatekeeper的態度が高いと感じるほど、既婚男性の家事の行動意図は抑制される（同 -.17）

しかしながら、調査票に関して、以下のような問題点も明らかになった。

- F7：午後7時前に帰宅する回数：平日は週5日勤務が多いことを考えると、現在は「週7日」という選択肢があるが、「なし」、「週1回程度」、「週2-3回」、「ほぼ毎日」という選択肢でもよかったかもしれない。
- 問8　実際の行動：選択肢が「行うだろう」～「行わないだろう」になっているが、これは「毎日」、「週5-6回」、「週3-4回」、「週1-2回」、「月1-2回」、「まったくない」などがより適切ではないか。
- 問11　性別役割分業観　選択肢2：「家事・育児は、夫婦で分担すべきである」の文言は「夫婦で別々に分担すべき（たとえば夫は仕事、妻は家庭）」とも、また逆の意味である「夫と妻は家事育児にともに参加すべき」とも読むことができる不適切な項目であった。「家事・育児は、夫婦でともに関わるべきである」などがより適切と考える。
- 問15　「妻のgatekeeper」：欠損値が744と多い。これは設問の文言に問題があったと考える。アンケートでは「あなたの配偶者は、どのようにお考えですか」となっている。これでは「妻に聞かないと、答えられない」設問となる。より正しくは「あなたの配偶者は、どのように考えていると、あなたは思いますか」である。平成25年度の全国調査では修正する必要がある。
- 連合所属の組合員に配布したので、全員を「正社員」と想定していたが、中には「短時間勤務」の方もいるようである。雇用形態（身分）に関する設問が必要であった。

その他、調査そのものに関する課題も見つかった。

- 現在の分析は子がいない家族も対象となっている。末子年齢を限定して分析できないか。
- 男女共修世代か否かによる分析ができないか。
- 世代効果を抽出できないか。
- 職場の雰囲気を採用している結果、自営業者が排除されている。職場雰囲気変数を除去したモデルでの分析を行う。

② 調査設計、手続き

2年計画の最終年度である平成25年度は、これら調査票の問題点や課題を修正した上で、労働組合員だけを対象とするのではなく、全国の雇用者を対象に実施することが主たる命題であった。そこで我々は、全国調査の調査票作成の手順として、次のように進めた。

- 方針：昨年度、組合員を対象に実施したアンケートを半分程度に圧縮し、大規模全国調査を実施する。
- そのために、昨年度の分析で結局は使えなかった変数、使わなかった変数、有効性が確認されなかった変数（例：TRA理論の先行変数ではあるが、有意な結果の得にくい主観的な態度である問2、重要な他者への服従程度を問う問4、問7や職場変数、その他一人暮らし経験、職業（対象者職業限定して抽出するため）、全般的ジェンダー意識（詳細版に変更：4つの志向性にグループされる予定）を優先的に割愛する。
- その上で、新たに今年度、追加したい項目があれば、メール協議を行う。たとえば、

- 黒川:関心は、家事参加意図に関わる教育の効果を教育の種類に分けて調べること。すなわち、家庭科教育の効果に関わる質問項目3-10をそのまま同じ内容で「社会教育を通して」として聞きたい。社会教育は今のところ、以下の種類の教育を考えています。「カルチャーセンター、大学の公開講座、職場でのセミナー、行政や民間団体の行う市民講座、PTA主催の講演、など」。それぞれについての参加を「はい」「いいえ」で尋ね、はいの数を指標とする。
- 高橋:関心は2点ある。1点目は「機会費用」に関する設問を加えたい。家事をしている男性は家計を管理する傾向が抽出され、金銭との関わりが深い。機会費用の額について知っている可能性が高い。女性の機会費用の高さを知っているから、家事を行い、妻の継続就業をプッシュしているのではないか。この点を確認したい。2点目は、男性gender意識と家事参加の関連を改良することだ。具体的には、内閣府調査で男性のgender意識は単一なものではなく、多様で複数の次元をもつことが明らかになっている。この知見を取り組み、男性のもつgender意識のどの側面が、家事を促進したり抑制したりしているか、確認したい。
- 倉元:昨年度同様、家事の知識・技術に関して研究を進めたい。

③ 調査対象者、上限年齢の設定、調査会社の選定と実査

以上の議論から、今回の調査対象者は、「既婚男性、6歳未満の子あり、年齢30-39歳、職業は会社員(経営者や自営業などを除く)、昨年度調査は地方在住者がほとんどだったため、居住エリアは関東で50%、その他で50%」とした。男性が家事参加することが妻の就業継続が促進される年齢となると、キャリア形成の早い時期となる。さて、男性の年齢上限を何歳と設定するか、39歳までとするか、44歳までとするか。まず分析案から検討した。

表 2 予定サンプル数(計 2000 サンプル)

年齢(2014 年 3 月)	首都圏(1 都 3 県)	その他
30 歳	100	100
31	100	100
32	100	100
33	100	100
34	100	100
35	100	100
36	100	100
37	100	100
38	100	100
39 歳	100	100

年齢が直接関連するのが、黒川の関心である。黒川は、家庭科の男女共修世代か否かで「子のいる 30 代夫」の家事参加がどの程度、有意に異なるか、つまり、家庭科教育の男女共修の効果を測定することにある。周知の通り、1994 年に高等学校においても共修となり(2014 年は共修 20 周年目)、共修第一世代は 30 歳代半ばとなる。30-34 歳と 35-39 歳で比較すること

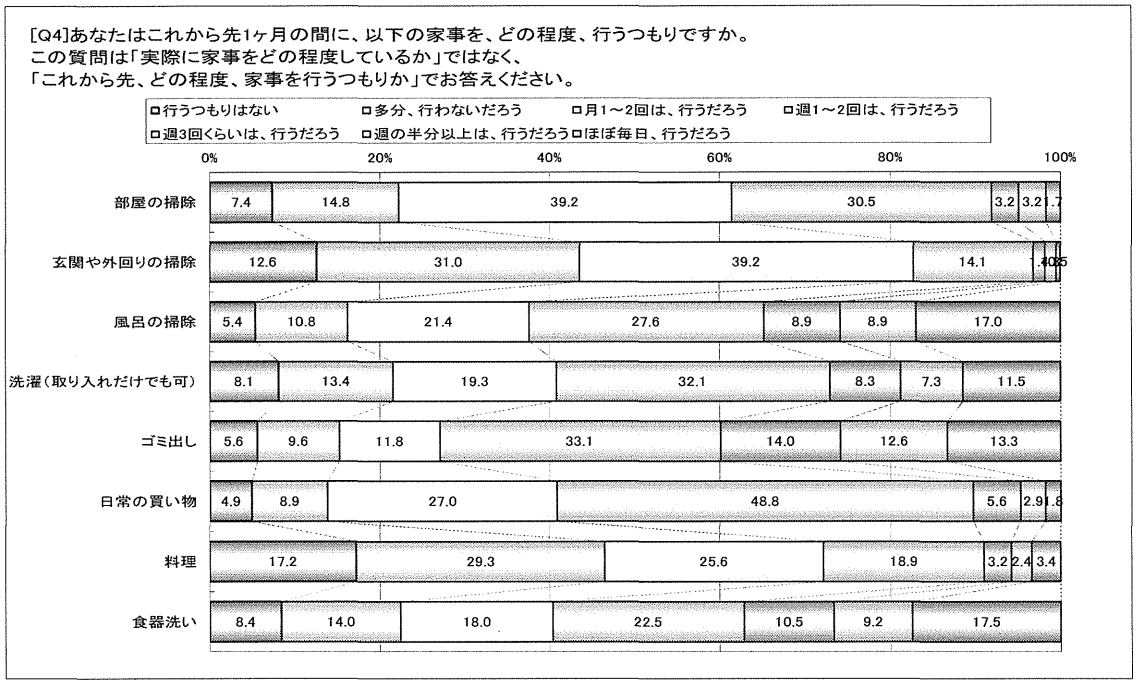
ができる。そして予算から、「30-39 歳」と設定された。

次は、調査をどの会社に依頼するのか、である。「子のいる30代夫」で、かつ、それぞれの年齢で100サンプルほしいとなると、若い既婚男性を多数保有している大規模調査会社となる。複数リサーチ会社に問い合わせをし、見積もりを出してもらった中から、今回は、リサーチモニタ数が最も多く、30歳既婚男性・子有りで100人確保の見込みの最も高い「マクロミル」(http://www.macromill.com/monitor_info/pdf/20140204web.pdf)を選定した。

④ 結果

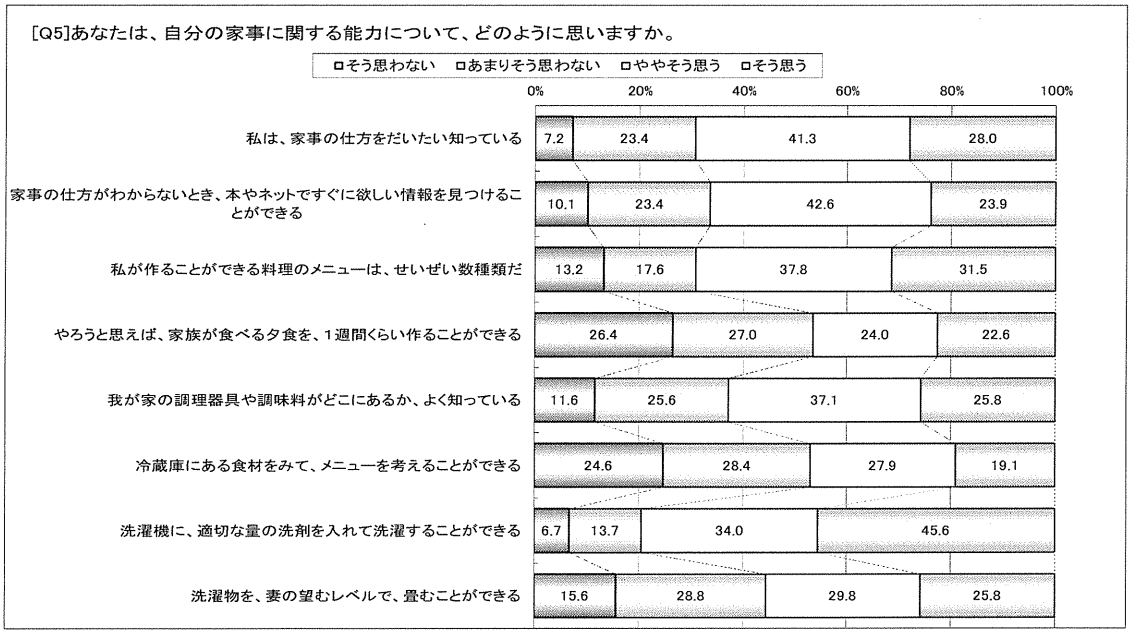
(クロス集計)

ア. 家事参加の意図



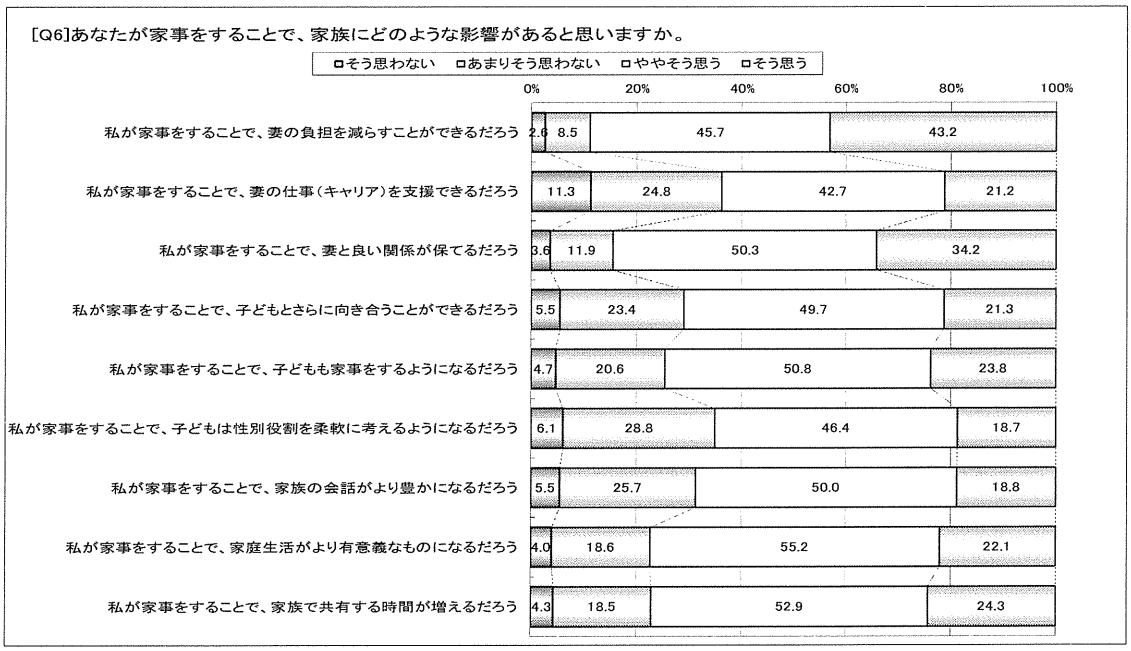
選択肢数を増やして実施した。30 代で結婚し、すでに 6 歳未満の子どものいる男性(以下、「子のいる 30 代夫」と略期)の家事行動に対する意図は、2 パターンに分かれるようだ。1 つめは「やりたくない家事」。図からも明らかなように、「玄関や外周りの掃除」と「料理」になる。新潟では高齢男性が「玄関や外周りの掃除」を担当する傾向にあるが、年齢が異なるからであろうか、その傾向は確認されなかった。その他の家事は週 1 以上で関与しようとしていることがわかる。

イ.　自分の家事能力



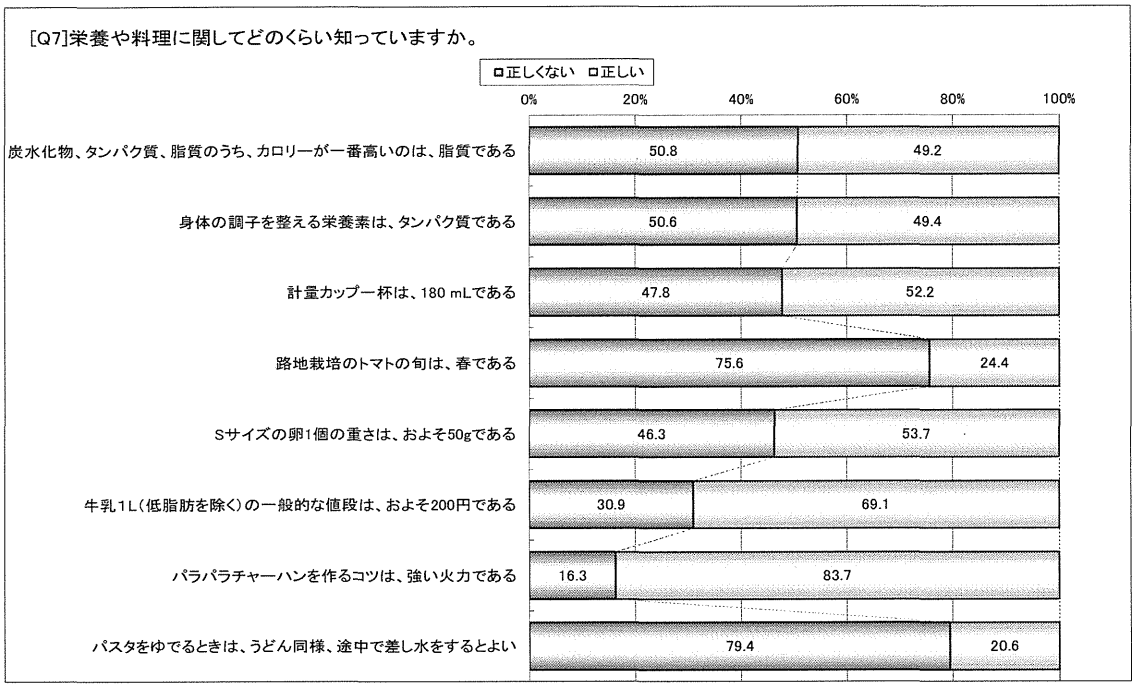
「家事の仕方をだいたい知って」いて、「わからない時は、本やネットでほしい情報をみつけることができる」が、「家族が食べる夕食を、1 週間くらい作ること」や「冷蔵庫にある食材からメニューを考える」家事能力的には自信がないようだ。

ウ.　家事をすることの家族への影響



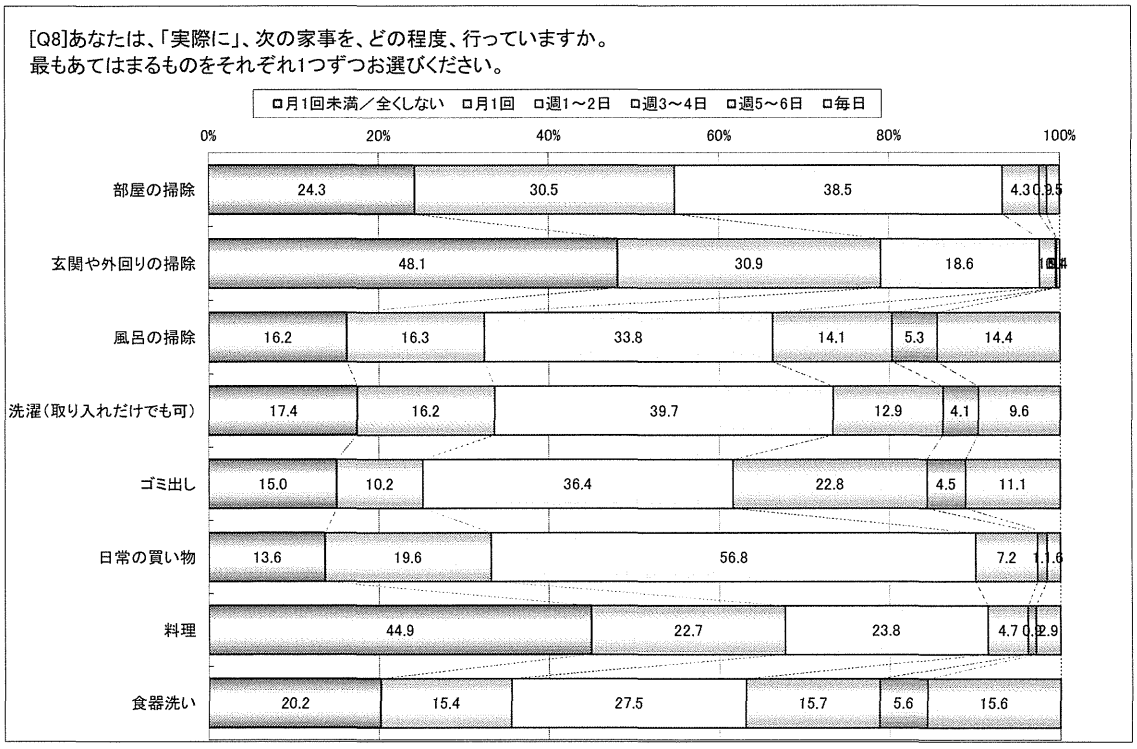
自分が家事をすることで、「妻の負担を減らし」、「妻と良い関係が保て」て、「家庭生活がより有意義なものになる」と思っている。自分をすることで「妻の仕事（キャリア）を支援している」の割合が低くなっているのは、無業の妻の「子のいる 30 代夫」をふくむため、と考える。

エ.　栄養や料理に関する知識



意外と栄養に関する「子のいる 30 代夫」の知識は曖昧である。しかしながら、料理行動に関する知識、「パラパラチャーハンのコツ」や「差し水」の正答率は高い。

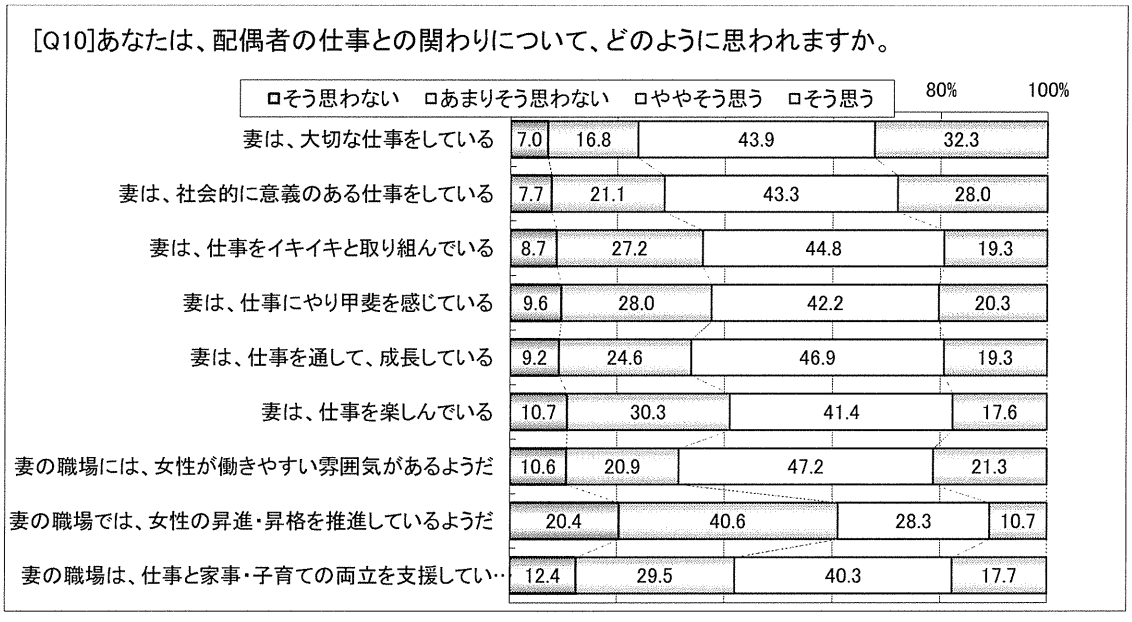
オ.　実際の家事頻度



「子のいる 30 代夫」の実際の家事頻度(自己申告)である。週の大半(3-4 日以上)担当している家事で多いのが「風呂の掃除」、「ゴミ出し」と「食器洗い」である。逆に、ほとんどタッチしていない家事は「部屋の掃除」、「玄関や外周りの掃除」、「日常の買い物」や「料理」である。

「子のいる 30 代夫」は、週末、まとめて日常の買い物をすると予想したが、低い結果となった。これは我々が意図した「日常」は「日用品や食材」であったが、回答者はこれを「毎日の」と読み替えたのであろうか。疑問が残る。

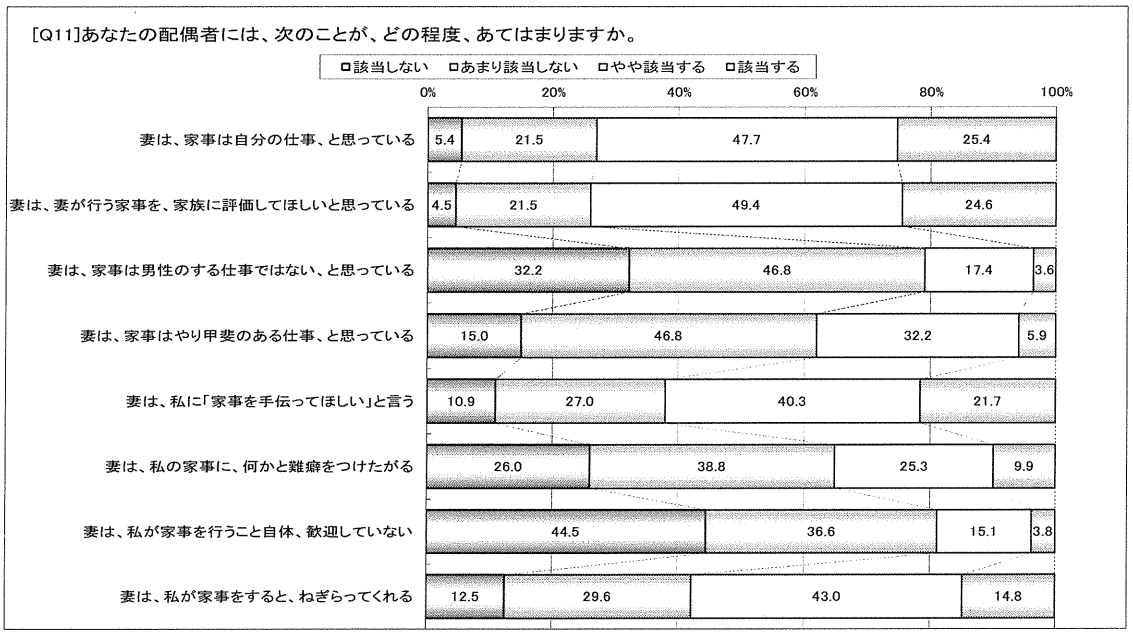
カ.　配偶者との仕事の関わり評価



該当者のみ、回答している項目である。「子のいる 30 代夫」からみた、妻の仕事関わりである。

妻は、「大切な仕事をし」、「意義ある仕事をし」、「いきいきと」、「やりがいを感じ」、「仕事を通して」時には「仕事を楽しんで」いる。夫からみて、妻の職場の過半数は「女性の昇進・昇格を推進している」ようには思えないが、「仕事と家事・子育ての両立支援」は行っていると評価している。つまり、長く働く支援はしているが、組織内キャリアピラミッドでの垂直移動への支援は、手薄いようである。

キ.　妻の gatekeeper 評価



（回帰分析）

分析 1:従属変数は、家事の行動意図、である。説明変数は本人領域から「家事能力」、家族領域から「妻の仕事評価」、「妻の gatekeeper」、「自分が家事をすることで家族への影響」、社会領域から「家庭科教育の効果」の 5 つである。

分析 2:従属変数は、家事行動の頻度、である。

分析 2-1:説明変数は、中範囲理論的変数、具体的には夫本人の gender 観、夜 7 時までの帰宅回数（頻度）と、親同居変数の 3 つである。

分析 2-2:その上で、さらに分析 1 の項目を足して行う

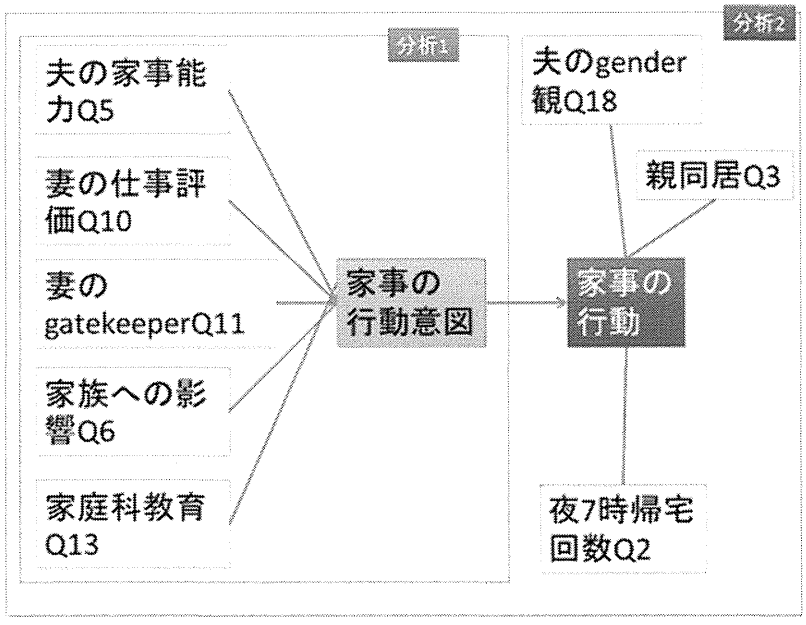


図 3 分析枠組み

(注)変数名の最後のアルファベットと数字は、調査票と対応している。

① 変数の作成

【従属変数】

家事の行動意図: 調査票設問 1-8 の合計値、アルファ係数 .763（8 項目）。

家事の行動: 調査票設問 1-8 の合計値、アルファ係数 .729（8 項目）。

【独立変数】

夫の家事能力: 調査票設問 1-8 の合計値、アルファ係数 .698（8 項目）。

妻の仕事評価: 調査票設問 1-6 の合計値、アルファ係数 .857（6 項目）。妻と仕事との関わりに注目し、妻の職場の雰囲気に関する項目は割愛した。

妻の gatekeeper: 8 項目から試験的に作成したが、因子分析で先行研究のような下位尺度が確認されなかった。そこで、調査票設問 1-5 を対象に、アルファ係数を高める目的で、設問 1 をはずした合計 4 項目を用いた。アルファ係数 .647。

家族への影響: 調査票設問 1-9 の合計値、アルファ係数 .873（9 項目）。

家庭科教育: 調査票設問 1-8 の合計値、アルファ係数 .918（8 項目）。

夫の gender 観: 内閣府調査の指標を抜粋して用いた。単純構造になるよう 6 回、因子分析を繰り返した結果が表 1 である。第 1 因子は「主導権握りたい因子」、第 2 因子は「大黒柱としての意識因子」、第 3 因子は「仕事に対する真摯な取り組み因子」、そして第 4 因子は「従順な妻志向因子」である。

親同居: 同居＝3、近居・隣居＝2、非同居＝1 と変換した。

夜 7 時帰宅回数: 調査票設問の通りである。

② 階層的回帰分析の結果

夫の家事能力の自己評価が高いほど、妻の仕事評価が高いほど、妻の gatekeeper 度が低いほど、自分が家事を遂行することで家族への影響を肯定的に評価するほど、そして家庭科教育を評価するほど、家事の行動意図を促進させる結果となった。

表 3 家事の行動意図に関する回帰分析結果

	ベータ	
(定数)		
夫の家事能力	.418	***
妻の仕事評価	.065	*
妻のgatekeeper	−.109	***
家族への影響	.120	***
家庭科教育	.097	***
F 値	83.765	***
R2 乗	.281	
調整済み R2 乗	.277	

これに、中範囲的なジェンダー意識を加えた結果が表 4 である。

表 4 家事の行動に関する階層的回帰分析結果

	Model1		Model2	
(定数)				
夫の家事能力	.387	***	.387	***
妻の仕事評価	.086	**	.080	**
妻のgatekeeper	−.110	***	−.107	***
家族への影響	.086	**	.091	**
家庭科教育	.115	***	.092	**
親同居			−.085	**
夜7時までの帰宅回数			.070	***
夫gender第1因子			−.041	
夫gender第2因子(大黒柱)			−.057	+
夫gender第3因子			.015	
夫gender第4因子(従順な妻)			.063	*
F 値	68.296	***	33.803	***
R2 乗	.241		.258	
調整済み R2 乗	.238		.251	

Model1 以外でも、説明できる。夜 7 時までに帰宅する回数が多いほど、また、従順な妻志向得点が高い男性ほど、家事に関わる結果となった。

影響力という観点でみると、自身の家事能力評価が最も大きい。つまり、夫が自分は、雑誌などから必要な情報を得て、家事を行うことができる、という意識をもつことができれば、家事を遂行する。自分は家事をできる、という意識をもつには、仕事同様、日常的に関わるか、家事をして美味しいとか、キレイになったといって家事行為を褒められた経験があるか、釣りを通して魚をさばいているとか、観察実習で子ども時代、男親が家事に関与していた記憶がある、といった生活体験が必要である。その機会をより多く提供する仕組みの構築が必要である。

研究課題 2-3 「21 世紀成年者縦断調査」(継続)　　倉元・高橋

前年度の結果をふまえて、第 1 回から第 9 回までの間に夫の家事参加がどのように変化しているか、夫の家事育児参加に影響を与える要因、妻の側の要因との関係について分析を行うとともに、夫の家事参加に関連する要因、子ども数の増加に関連する要因の時間的変化を明らかにした。

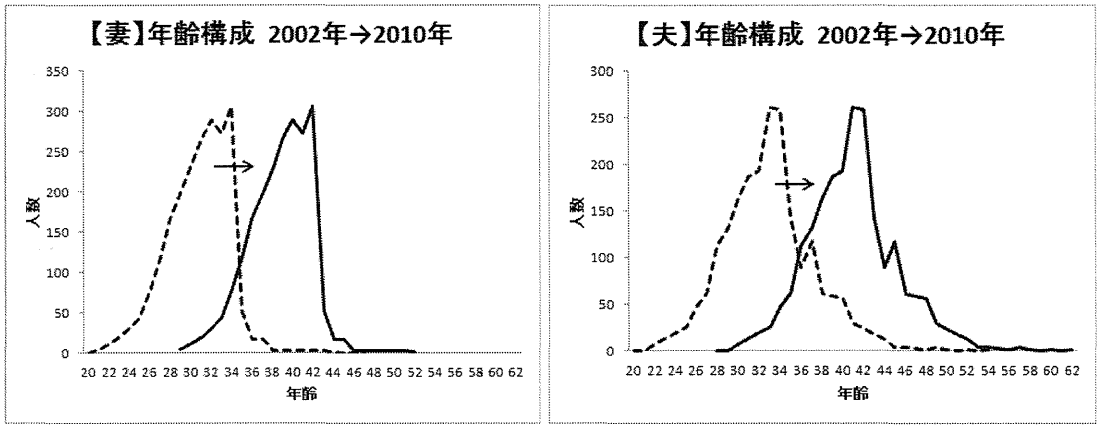


図 4 年齢構成の変化(2002 年→2010 年)

① 家事・育児参加状況

家事参加の指標である家事・育児時間について検討する。

2002 年の家事・育児時間は、妻の場合、平日 10.0 時間、休日 11.3 時間、夫の場合、平日 1.3 時間、休日 5.6 時間であった。この時、妻は平日、休日とも 1 日の大半を家事・育児に費やしていることがわかる。また、夫の平日の家事・育児時間は妻のわずかに 13%に過ぎない。とはいえ、休日には妻の 50%であり、夫妻が協力して家事・育児に関わっている。

これらの変数は、2010 年には、妻・平日 7.5 時間、休日 9.9 時間、夫・平日 1.0 時間、休日 4.3 時間となった。それぞれ、妻・平日 25%減、休日 12%減、夫・平日 23%減、休日 23%減であった。夫の家事・育児への参加が相対的に減少している。これらには特に子どもの状況の変化が影響していると考えられる。

これらのことから、夫の家事・育児時間は、それぞれの仕事や所得などの変数よりもむしろ、妻の

家事・育児時間や夫と妻の希望子ども数と強い相関を持っていることが分かった。子どもがどう育っているか、何人の子どもをもつか、夫妻が相互によりよいコミュニケーションをとっていることが重要だと考えられる。

なお、2004 年に正の相関があった「夫の休日の家事・育児時間」と「妻の仕事の有無」との間には、2010 年には相関が見られなかった。これは、2004 年と 2010 年の間の子どもの状況、妻の仕事の状況の変化が主な要因であると考えられる。

次に、夫の家事・育児時間以外の変数のうち、2004 年と 2010 年との間で相関係数に変化があった項目について検討すると、2010 年に有意差が生まれたのは「夫の 1 週間の就業時間」と「妻の年齢(負の相関)」「夫の年齢(負の相関)」「親との同居(正の相関)」「末子年齢(負の相関)」との間、「1 日の仕事時間」と「親との同居(負の相関)」「末子年齢(負の相関)」との間、「平日の家事・育児時間」と「妻の仕事の有無(負の相関)」「妻の希望子ども数(正の相関)」との間であった。

2004 年と 2010 年との間で有意差が消失したのは、「妻の仕事の有無」と「夫の年齢(負)」との間、「妻の1日の仕事時間」と「末子年齢」「妻の仕事の有無」との間、「妻の休日の家事・育児時間」と「1 日の仕事時間」との間、「妻の希望子ども数」と「妻の年齢」「親との同居」の間、「夫の 1 週間の就業時間」と「世帯総所得」との間、「夫の最終学歴」と「妻の 1 日の仕事時間」「希望子ども数」との間、「夫の平日の家事・育児時間」と「「妻の平日の家事・育児時間」との間、「夫の希望子ども数」と「親との同居」「夫の 1 日の仕事時間」「夫の最終学歴」の間であった。

有意差の生成と消失に関連している要因には「時間」によって変化する子どもの状況(上述)および仕事(後述)がある。2004 年と 2010 年のあいだのこれらの変数の変化とその影響について、さらに検討が必要である。

D　考察

(1) ヒアリング調査から明らかになった、家事の行動意図に影響を与える変数

(促進させる変数)

① 「家族生活の経験」＝子ども時代、共働きの両親のためにチャーハンなど手軽な料理を作っても両親から常に「褒められた」

両親は自営業で、その家の長男として育った。弟が1人いる。父親が料理、掃除など何でもする人で、その姿を見て育った。店にあった食材で小学生のころからチャーハンや焼きそばを作った。両親は「うまいなあ～」「また作ってね」といって、いつも褒めてくれた。だから「また作ろう」とやる気になった(新潟、O氏)。

② 「家族生活の経験」＝子ども時代、母親が父親の晩酌のさかなを作っているのを一緒にみていた

父親が遅くかえってくると、母親は晩酌用のおかずを作っていた。それを見るのが好きだった。つまみ食いもできる。小学3年生頃だろうか。料理を作る場面を日常的に見ているので、スキルや知識としてではなく「絵」「イメージ」として入っているから、現在でも問題なく作ることができる。（兵庫、Oh氏）

・酒のつまみは、主食になる。たとえば、餃子やピザなど。我が家は皮から作った。両親とも凝り性で実家には「ピザ釜」がある。当時から「パン焼き器」もあった。（兵庫、Oh氏）

③ 「学校教育（家庭科）の経験」＝小学校の家庭科でカレーを作るために友達と買い出しにいった。その時、家によりカレーの味が異なることを発見。味に多様性があってよいことに気づく。そこから、どうすれば両親の作る料理が美味しくなるか、理科の実験よろしく自己流の味付けが始まった。

男女共修だった。記憶に残っている調理実習は小学校時代の「カレー」と「豚汁」。特にカレーは、材料の買い出し（予算制約あり）から友人たちと一緒にスーパーにいって、カレーの銘柄はバーモントだ、印度カレーだ、いやジャワカレーだといって「ゲーム感覚」で友達と楽しくワイワイやった。最終的に印度カレーとジャワカレーのハーフ＆ハーフでカレーを作った。味についての記憶はないが作るまでの過程は、鮮明に覚えている。その他、中高で調理実習をしたと思うが、記憶にない。楽しくなかったから、美味しいと思わなかったから、記憶にないのではないか（新潟、S氏）。

高校生くらいから食へのこだわりが明確になった。「逸品のこだわり」。たとえばカレー。母親が作ったカレーに「インスタントコーヒー」を加えて自分好みの味にアレンジしていた。家族、とくに母親は「何なの？」って感じだったが。その他、カツオの刺身にマヨネーズをつけて食べるのも、現在では若者向けに受ける食べ方だが、美味しかったから高校時代からやっていた（新潟、S氏）。

④ 「子ども」の反応

以前は、メインの一品にこだわり、それを大皿にドカンと盛り、あとは御飯とサラダ、という感じだった。しかし、どうもおちつかない。そこで、お総菜を買ってきて、お皿に移してテーブルに出して、品数を増やした。そのうち、豚肉を買ってくると、それでドカンと1品を作るのではなく、2つにわけて、それぞれ別の料理をして皿数を増やすようになった。野菜も、人参をコンソメで湯がいたりして、テーブルに出す。すると、子どもたちが「パーティみたいな感じ！」といって喜んで食べてくれる。現在、

妻が入院中で何にかも一人でやらなくてならないから久しぶりに一皿ドカン料理を出すと「今日は料理少ないね・・」といわれた。しかし、子どもたちもよくわかっている。妻が入院することになったとき「これまではパパとママでやってきたことを、パパが一人でやらなくてはならないから、お手伝いしてね」というと、長女は「うん」といってくれたし、昨日も「パパ、美味しいよ」、「作ってくれてありがとう」といってさりげなく、労ってくれる(新潟、T氏)。

⑤ 「夫婦間の年収勢力」＝「嫁が自分とほぼ同額稼いでいるから、自分は家族の料理を作っている。嫁の収入がワーキング・プアだったら、絶対自分は作らない」

すべての前提に、妻が自分と同額もしくは(1歳年上で公務員ということもあり)少し多い給与を稼いでいる、ということがある。仮に、妻がフルタイムで働いていたとしても年収200万円に届かないようなワーキング・プア的な働き方だったら、当然、家事はすべて妻にやれ、といっているだろう(新潟、I氏)。

⑥ 生活というものに対する認識：より効率的に行い、趣味や夫婦の時間を紡ぎ出したい

自分の時間がほしいから。それは、自分の時間が欲しいから。趣味はランニング。学生時代、自転車部に属していた。富士登山レースに出場した。トレーニングは土日。早朝6時に起きてトレーニングをしている。夫が趣味をもっていることが大事。趣味があれば、工夫して効率よく料理でもやろうと思うはず(兵庫、N氏)

⑦ 生活というものに対する認識：夫婦間でバランスが悪いのは良くない、何でも fifty fifty でやりたい。

「夫婦でバランスが悪いのって良くないと思って」。お見合いのときも「働いている女性が良い」といった。お互い、fifty fiftyでやりたいと思ったから(兵庫、N氏)

(抑制させる変数)

① 妻の「gatekeeper」的行動

妻は料理が上手だし、台所にはあなたは入ってこないでオーラを出している。具体的には、自分や子供たちが食べた食器くらい下げようかとすると「いい、いい、やめて、やめて」と言って阻止する。ジェンダー化されているというか、妻はキッチンに入られることを嫌がる。それもあって、料理はほとんどしない。今日も弁当をもっているが、妻が作ってくれた。キャンプなどでバーベキューはするが、これは家事というより趣味だ(新潟、N氏)。

② 家事分担に関する話し会いがないこと、認識の違い

妻は日頃、自分に家事をやってほしいとは一言もいわないが、何かのはずみに「あなたは家事を少しも手伝ってくれないから」と怒っていう。自分は、家事は妻の仕事

のようになってしまっているから、「何をしたらいいのか分からない」,「急に自分からやると言い出しにくい」。何もしていないが、自分が家事を分担していないことに不満があったのかとその時、驚いた。怒ったときにいうものだから、こちらも意地になって家事をしない。妻がもうすこし、うまく、働きかけてくれると良いのだが・・・。他方、育児に関しては、自分もやるもの、という暗黙の雰囲気がある。妻が「そうしてくれている」のかもしれない。「第1子の時から自分が子育てをしていたからかなあ」。

第3子出産後、自宅に戻った当初は、朝食の仕度はそれまでの流れで自分がしていた。そのうち、妻が「そろっと大丈夫よ」といったので、作らなくなった(新潟、F氏)。

(2) **家事をしようという行動意図に影響を与える変数は、独自アンケート調査ならびにインターネット調査から、以下のように纏められる。**

・TRA理論の枠組みに基づいた階層的回帰分析結果からは、夫の家事能力の自己評価が高いほど(β =.418, p<.001)、妻のgatekeeper度が低いほど(β =.109, p<.001)、自分が家事を遂行することで家族への影響を肯定的に評価するほど(β =.120, p<.001)、そして家庭科教育を評価するほど(β =.097, p<.001)、家事参加の行動意図を促進させる結果を得た。

・家事参加に対する行動意図に、TRA理論の枠組みを適用することは、可能である。

(3) **「21 世紀成年者縦断調査」から、夫の家事・育児時間は、仕事や所得変数よりも、妻の家事・育児時間や夫と妻の希望子ども数と強い相関を持っていることなどが明らかになった。**

E　結論

1)「家事は女性が行うもの」という認識の高い日本で既婚男性の家事参加を促進させるには何が有効策か。ヒアリング調査での感触では、妻の収入がある程度高いこと、が大切な要因と感じた。そのためには、女性が簡単に労働市場から退出せず、育児休業を使いながら正社員として継続就業できる環境をさらに整備さえることが必要である。その1つのヒントが「機会費用」という概念の周知、である。量的に実証できていないが、ヒアリングで機会費用概念を説明すると男性は「妻に正社員として働き続けてもらうために、俺がもうちょっと家事をするか」という反応が多い。平成9年国民生活白書以降発表されているこの情報を、もっとPRすべきと考える。なお、この点に関しては今年度、自主研究として、アンケート調査を実施中である。

2)その他、家事参加への行動意図に影響を与える仮説はfifty fifty仮説、家計管理仮説、生活の質追求仮説、達成感仮説、現代家長仮説や家庭科教育の効果仮説、である。

3)「良い母親」の意識改革が必要である。「家事を完璧にこなすことが良い母親」という風潮がある。手作り志向、キャラ弁など良い母親の基準を高く設定し、母親たちが相互に競う傾向にある。しかしながら、このような傾向は逆に、「とても出来ない」と夫の家事参加意欲を萎えさせ、母親の二重負担を重くするという結果をもたらしていることに早く気づくべきであろう。良い母親のレベルが高すぎるのである。家事も弁当ももう少し気楽に考えて、家族で一緒にするもの、豪華な時もふつうの弁当のときもある、という意識づけを行うことが大切である。

4)転職行動に関する私の研究では、転職を考え始める時期は、職場に「居場所がない」と思いはじめる頃である。家事参加も同様と感じた。つまり、台所が自分の場所でない、と思うと、その領域への積極的参加意欲はなくなる。台所は妻のプライベートな場所と、感じさせないことも大事である。台所は家族みんなの場所で、調理器具や調味料が整然と整理されていることが必要だ。居心地の悪さを感じさせない配慮・知恵も求められる。

5)夫の家事参加は時間的余裕、私たちの第1年度(連合調査)、2年度研究(インターネット調査)ともに、午後7時までに帰宅する回数が多いほど、参加する結果が確認された($\beta 1 = .056$、$p<.001$; $\beta 2 = .070$、$p<.001$)。労働時間の残業規制が必要である。もしくは残業するなら、伊藤忠商事の取り組みのように「早朝」残業への政策誘導が有効と考える。

6)そのためには、両親のためのプライベートな部屋の確保、も重要な政策課題である。子ども部屋は確保されているが、両親のための部屋がある家庭はどれほどあるだろうか。父親が早くかえって素の自分に戻れる場所＝部屋、が必要である(本研究の範囲を超えるため、詳細な言及は行わない)。

7)家庭生活に関する社会学習の機会がない日本(アメリカ、台湾や韓国ではfamily life educatorといわれる、家庭生活に関して教育する、認証を受けた専門家が存在する)。男性の行動は企業風土から影響を受けやすいことを考えると、企業という組織を通した仕組みを作ることが欠かせない。退職前のライフプランニングに関する研修は増えている。これの若年期版を、ランチタイムを利用して行うことも有効と考える。

F　研究発表

(1)　論文発表

なし

(2)　学会発表

・黒川衣代・高橋桂子・倉元綾子(2014)「既婚男性の「家族・家庭生活」に対する家庭科教育効果の認識:履修タイプによる比較」日本家庭科教育学会第57回大会(6/28、岡山大学)

・Takahashi, Keiko and Kurokawa, Kinuyo, 2014, What factors affect the intention to participate in the household work of married men in Japan? : a qualitative study, XVIII International Sociological Association, July 15 Yokohama: Japan

・Kurokawa, Kinuyo, Takahashi, Keiko, and Kuramoto, Ayako, 2014, Is family life education at school in Japan effective for Japanese fathers? NCFR 76th annual conference, Nov. 19, The Hilton Baltimore, Baltimore: Maryland (accepted)

G　知的所有権の取得状況

(1)　特許取得

なし

(2)　実用新案登録

なし

(3)　その他

なし

(以上)